鶴が丘だより

東京都町田市三輪緑山二丁目2133-1
医療法人社団鶴永会鶴が丘ガーデンホスピタル
院長後藤晶子
電話044(988)3121㈹

鶴が丘だより六〇〇号記念

「五〇年の歴史②」

■変革期（平成元年～平成二〇年）

脇崎孝雄（事務長　看護師）

私が入職したのは、昭和から平成という節目の年でした。当院は黎明期から創成期に掲げた理念を継続し、故永田前院長の掲げるノーマライゼーションを前面に、自由な発想からさらに色々な試みを実践していきました。

故高橋千恵光看護部長を中心に、全職員協力のもと、基準２類であった施設基準を、平成六年に基本２類看護へ、さらには、平成八年には新看護体制５：１取得と少しずつ上げ、リハビリ部門でも、平成九年デイケア（三十七名規模）の建築平成十一年に五〇名規模に増築と、着実にソフト面、ハード面の充実を図りました。平成十年には故永田前院長が、地域への貢献で医療功労賞を受賞しました。

その間医療と経済のバランスが問われる時代にさしかかり、すべてが順調という訳ではありませんでした。渡仲理事のご協力を得ながら、一般企業並みのものの見方や考え方に変えていくよう徹底的に鍊われました。

まず、経理部門では現金主義を発生主義に変え、当月の損益を見えるように、会計事務所に任せず、独自で試算表の作成、返済計画の見直しで手形を無くすなど、財政面でも業績を上げていきました。業者任せにせず、清掃やワックスがけを全職員で笑顔でやったことが懐かしく感じられ、今もこのスピリットを大事にしています。

平成十七年には阪内英世看護部長を迎え、翌年入院基本料１５：１、助手加算１０：１を取得しました。以後看護部顧問となった今に至るまで、彼を中心に病棟機能分化、看護の質の向上等が飛躍的に進んでいます。

ハード面では，病棟、病室も老朽・狭隘化対策を施すべく隣地の購入から、新棟建築まで、後藤副院長（現院長・理事長）を中心に行政、医療機構へ何回も足を運び、業者等の折衝、職員へのコンセプトの共有、地域の人たちへの説明会等々を経て、ようやく平成二十年九月に稼働することが出来ました。

駆け足で二〇年間を振り返りましたが、携わっていただいた大勢の皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。初心忘れるべからず！みんなで、精神医療という大海に船出して行きたいと思います。

■発展期そしてこれから

後藤晶子（院長　理事長）

新棟はコンセプトとして、「日常生活になるべく近い形で」「はじめての入院の方も不安なく過ごせる」「家族も癒される」「来てよかった」病院を目指すこととなりました。既に病床削減が謳われていた中、建替計画が評価され二〇〇床への増床が認められ、急性期疾患治療病棟、認知症治療病棟を新設しました。設計を担当した共同設計による新棟は、高低差のある難しい地形を克服し、心の敷居を下げ太陽光に恵まれ緑を身近に感じられる、まさに理念を具現化したものでした。「病院らしくない落ち着ける雰囲気」を目標にしましたが、面白いエピソードがあります。隣の「BS」よりドラマで使用するため病院のロケ依頼がありましたが、テスト撮りで多くのグリーンや絨毯、居間のような雰囲気が病院らしく映らないとの事で、取り下げられたのです。

また病院名を「鶴が丘ガーデンホスピタル」へ改称しました。ここには「こころの庭を豊かに耕せる場に」という思いが込められています。同時に治療プログラムの整備を行い、増加する気分障害圏と、従来の統合失調症圏の患者様向けに

多職種治療チームを立ち上げ、「チームストレスケア」「チームリハビリ」と命名され、それぞれ国府台式家族心理教育プログラム「丘の上の家族の集い」、「こころのカレッジ」を展開し、そのリベラルで活気ある活動は、患者様のみならずスタッフ教育にも効果を上げ、ここから多くの役職者が排出されました。現在はさらに認知行動療法やMMR（令和元年～）が加わり、形を変えています。多職種協働で自由な開院時からのスピリットが脈々と受け継がれ、文化として今に根付いています。

そして精神医療への敷居を下げることを目的に、一般の方向けに成人検診業務、予防注射等を開始しました。また外来ホールでロビーコンサートを定期開催し、毎回一〇〇人超のお客様がいらしています。

平成二十三年東日本大震災では震度5弱を経験しましたが、幸い負傷者や病院機能への支障なく乗り越えました。この経験から以後防災訓練や急変時訓練の頻度を上げ有事に備えています。平成二十四年五月持病の心不全の悪化から故永田實男院長が他界し、同年六月より私が院長を引き継ぎました。先日「父としての永田實男先生の思い出は何ですか」と尋ねられ、思い出したのは何気ない毎日の風景でした。昔から、晩年は孫に対しても朝は必ず玄関まで見送り、帰宅するとなぜか部屋は空調がすでに入っていました。その場では気付かないけれど心の一番深い部分を支え、勇気をくれる存在でした。四十一年に渡り、温厚で慈愛に満ちた精神医療を体現してきた存在を失い、職員の動揺は否めませんでしたがそれぞれの使命感のもと、理念の実践を皆で約束しました。

その後指定病床取得、精神科専門医連携機関認可、精神科急性期病棟医師加算を取得し、精神保健指定医ならびに精神科専門医指導医取得可能な医療機関への体制を整え、毎年複数の精神科専攻医が赴任されるようになりました。看護教育も同様で、院内研究発表や事例検討を積み重ねる中で徐々にスキルアップし、現在は慶應義塾や杏林大学を始め多くの実習受け入れを行っています。さらに中学生の職場実習も受け入れるようになり、教育機関としての使命も果たせるようになりつつあります。

当院の特徴のひとつに「県境」であることが挙げられますが、神奈川から通院される方の利便性向上のため、以前より計画していた分院が平成二十五年十二月開院しました。関東逓信病院を退職後、平成八年より当院副院長として活躍された故鈴木良雄先生が初代所長を引き受けて下さり、盤石な船出となりました。令和二年四月より、私の先輩である吉野文浩先生が二代目の所長として引き継ぎ、さらに重厚な体制となっています。引継ぎを待つことなく直前に急逝された鈴木先生。享年八十四歳ながら精力的に活躍され、その読書量、患者様への愛情から沢山の事を教えていただきました。

当院の歴史をご紹介して参りましたが、今後ここにどのような歴史が加わっていくのでしょうか。

厚生労働省によると、当院の二次医療圏では今後人口微減、団塊世代の方が定年退職後地元で医療を受け始めるため高齢者人口急増と予測しています。さらにベッドタウンで既に8050問題に直面しています。また学校も多い地区で、若年人口は減少しても受療人口は増加するといわれています。そして平成二十九年に、これまで高齢者対応であったものを広げ「精神障がい者にも対応した地域包括ケアシステム」の構築を目指す、とも打ち出しています。令和二年のコロナ禍では新たな価値の転換がはかられ、今後を見通すひとつの貴重な機会となりました。キーワードは「個別化」「短期集中治療」「リカバリー支援」です。このためには病院も多機能を持たなければなりません。患者様とそのご家族が地域の一員として、安心して自分らしく暮らせるように、訪問診療、訪問看護ステーション、オンライン対応、住居確保等課題は山積しています。これを鶴が丘の仲間たちと、楽しみながら乗り越えていこうと思います。

…おわり